

して遺跡・遺構との関係を考えてみたいということである。

(1) 上野原遺跡 (国分市川内)

上野原遺跡4工区からは、2本の道跡が確認された。いずれも、集落内から北側に緩やかに下りる道であり、道幅は80cm～3.4m程度である。傾斜角は2.7°～5.6°と割合に緩やかである。ほぼ自然の流水路に沿っていると考えられ、緩やかに蛇行しながら下っている様子がうかがえる。

2本の道跡は、遺跡の東の道と西の道として捉えられる。中央に割合に広く、安定した台地があり、西の道はほぼその西端を通っているのに対して、東の道は中央台地の東の端よりもやや内側、つまり中央寄りを通っている。

矩形に曲がることはないが、水が流れた跡を追うようにやや硬い面が見られたということである。中世や近世等のような非常に硬い面が見られないのは、当時の集落の人口が極端に多くないに加えて、上野原遺跡全体の地形が大きく北に傾斜していることで割合に頻繁に水の流れが発生していたと考えられることから、硬化した面が流水の作用によってたびたび流されてしまったことが推測される。また、水を受けやすい場所のため、草もよく生えていたであろうから、人の往来と水の頻繁な流れによって、それらの草も完全に根を張り切れない内に、踏みしめられて硬くなっては流され、その繰り返しの結果、ある程度の腐植土とやや硬い面の形成しか見られないことになったと考えられる。これは、縄文時代(それ以前の旧石器時代も含めて)の本県の遺跡の例でもほぼ同様と考えられる。

上野原遺跡では、住居跡52軒、集石39基、連穴土坑16基、



第1図 上野原遺跡検出の道跡

土坑約260基などが検出されている。これらの遺構を道跡との関係で見ると、次のようなことが指摘できよう。

西の道の西側には、住居跡3軒、集石4基、それに土坑12基がある。また、東の道の東側には、住居跡14軒のほか、集石が6基、土坑は32基と土坑群1か所が検出されている。東の方が西の道の西側よりも多いということは言えそうであるが、小尾根の中央と西側に偏在しており、それより東側の谷または追の方には遺構は確認されていない。

つまり、東と西に道のある、北側にならだかに傾斜した中央の台地に主として集落が展開する遺構の配置となっている、ということである。それも、割合に小高い南側の部分と、比較的低下した北側の部分とに分かれて住居があり、その中央に囲まれるようにして集石や土坑が散在している配置である。

東側の道は、東の小尾根の住居などとの行き来を可能とするように、緩やかな道となって小さく曲がりながら北側へ下っているのに対して、西側の道は若干の遺構はあるものの、それほど行き来に便利とは考えられないほど割合に急傾斜で大きくうねりながら北側に下りている。

また、東側の道は、南側の比較的高いところで3本の小道に分かれているが、それより高い地域には土坑2基と集石1基が見られるのみで、住居は作られていない。つまりは、この辺りが集落の南の端ということになりそうである。

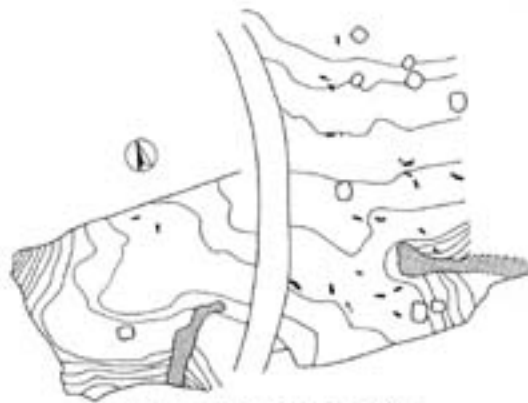
(2) 前原遺跡 (日置郡松元町福山)

住居跡7軒がハの字状に広がった形状で確認されたほか、集石・土坑なども多数検出された。追と谷の位置関係から3つの地区に分けられており、そのうちのB地区から2本の道跡が確認されている。

1本はB地区の中央部分から西へほぼ一直線に上がっている道であり、もう1本はB地区のC地区側から当初は北に上がったのち、上がりきる直前に東側にはほぼ直角に曲がって上がる道である。

いずれの道も硬化面が割合にしっかりしており、その意味からすると上野原遺跡のものよりも道跡として確実性が高いと言えよう。

直線的な道の幅は70cm～6.5m、傾斜角は4°～9.6°、道



第2図 前原遺跡検出の道跡